

いま いしやうのすけ
今井正之助

1950年、岐阜県生れ。名古屋大学大学院文学研究科博士課程後期課程中退。博士(文学)。現在、愛知教育大学教授。専攻、日本中世文学。主な著作に、『『太平記』の受容と変容——『太平記評判秘伝理尽鈔』『伝』の世界』(『国語と国文学』72-6)、『『太平記秘伝理尽鈔』の兵学——『甲陽軍鑑』との対比から』(『国語と国文学』79-3)などがある。

か みひろし
加美 宏

1934年、徳島県生れ。早稲田大学大学院文学研究科博士課程修了。博士(文学)。同志社大学名誉教授。専攻、日本中世文学。主な著作に、『太平記享受史論考』(桜楓社)、『太平記の受容と変容』(翰林書房)、『戦国軍記事典——群雄割拠篇』(共編、和泉書院)などがある。

ながさかしげゆき
長坂成行

1949年、愛知県生れ。名古屋大学大学院文学研究科博士課程後期単位取得満期退学。現在、奈良大学文学部教授。専攻、日本中世文学。主な著作に、『神宮徴古館本 太平記』(共編、和泉書院)、「内乱期の史論と文学」(『岩波講座 日本文学史』第6巻)、「水戸史館の『太平記』写本蒐集の一齣」(『軍記と語り物』38)などがある。

太平記秘伝理尽鈔 4 (全10巻)

東洋文庫 763

2007年6月11日 初版第1刷発行

	今井正之助
校注者	加美 宏
	長坂成行
発行者	下中直人
印刷	創栄図書印刷株式会社
製本	株式会社 石津製本所

電話編集 03-3818-0742 〒112-0001

発行所 営業 03-3818-0874 東京都文京区白山2-29-4

振替 00180-0-29639 株式会社 平凡社

平凡社ホームページ <http://www.heibonsha.co.jp/>

© 株式会社平凡社 2007 Printed in Japan

ISBN 978-4-582-80763-9

NDC 分類番号 913.5 全書判(17.5cm) 総ページ 488

乱丁・落丁本は直接読者サービス係でお取替えします(送料小社負担)

東洋文庫
763

平凡社

太平記秘伝理尽鈔
4

今井正之助
加美宏校注
長坂成行

装
幀
原

弘

凡例

一 本書は『太平記秘伝理尽鈔』の読みやすい本文を提供することを目的に、正保二年刊本（高知県立図書館山内文庫蔵）を翻刻し、注を付したものである。

一 翻刻にあたっては底本の形態を尊重しつつ、読解の便を考慮して以下のように底本を改めた。

1 底本の表記は漢字片仮名交じりであるが、振り仮名も含めて片仮名はすべて平仮名に改め、適宜、清濁を正した。漢字は原則として底本のまま残したが、漢文表記を訓み下す際、次の諸文字は平仮名に改めた（令・使↓しむ、不↓ず、可↓べし、被↓る・らる、与↓と、自↓より）。漢字の字体は新字体・通行のものに改めた。「𠂔」「𠂔」などの合字・異体字は「とも」「して」などとした。

2 漢文表記は原則として訓み下し文に改めたが、「加^{しかのみならず}之」のような慣用表現は元のまま残した。

3 明らかな脱字と思われるものは「」内に、誤字・宛字は（）内に通行の文字を補記した。

4 再読文字は漢字一字を繰り返す場合に「々」を残した以外は、文字を起こした。また「々」が行頭に来る場合や、「為義・々朝」のような人名の場合も文字を起こした。

5 底本の振り仮名のうち不要と思われるものは省いたが、残した振り仮名の仮名づかいは底

本のみである。ただし、「弁」^{ハキマヘ}など、語頭の「ハ」は、「弁へ」^{ワキマヘ}のように改めた。

振り仮名を補う場合は、片仮名で歴史的仮名づかいとした。

助詞、助動詞、用言の活用語尾に相当する振り仮名は、本文行に下ろしたが、新たに補う場合は振り仮名として表示した。たとえば、底本「……ト謂」^{イハ}は「……と謂ふ。」と改めたが、「……ト謂、」とある場合は、「……と謂、」^{イハ}とした。

6 底本と諸本との間に、意味の相違が生じる異同がある場合は、へゝ内に異文を記し、底本に無い詞章を諸本により補う場合は、■へゝのように示した。対校には、十八冊本を主として、天理本、大橋本、長谷川本を用い、巻一から一〇については中之島本をも参照した。十八冊本以外の表記を採った場合は、へ〇〇大橋本ゝのように注記した（複数の伝本が同種の表記である場合も、注記には一本のみ示す）。

へゝ内の異文表記も底本の方針に準じて平仮名に改めた。ただし、後注に引用する場合は、原表記に即して片仮名のままとした。

7 口伝傍書はそのまま行間に表示した。版本にない口伝の類は、必要と思われるもののみ採り上げ、（ ）内に伝本名を示した。

8 底本にある改行の他に、内容に従って適宜改行し、上欄外に小見出しを付けた。本文中の『太平記』と同じ章段名の頭にある○は、◎に改めた。また、句読点・並列点・会話記号などを付し、書名は『』で括った。

9 底本が『太平記』の詞章をほぼそのまま引用している箇所はゴチック体にし、その後の

(一) 内に日本古典文学大系『太平記』の巻・頁数を小字で示した。

10 底本検索の便のため、改丁箇所に△を付し、下欄外に底本の柱刻丁数を示した。

一 注記事項は次のように示した。

1 語釈などの簡略な注は本文中の(一)内に記した。その他は、本文右肩に漢数字の通し番号を付し、各巻ごとに後注とした。

2 『理尽鈔』の異本を含め、注に引用する資料は、漢字を通行の字体とし、清濁・句読点を補った他は、原則として依拠本の様態に従った。ただし、『太平記』『陰符抄』などの部分的な漢文表記は読み下した。また『吾妻鏡』(『訓読吾妻鏡』)、『六韜』、『三略』(中国古典新書)、『孫子』、『論語』(岩波文庫)などは、平仮名交じりの読み下し文に拠った。

3 『太平記』の校注本は略称を用いた。岩波書店・日本古典文学大系(『大系』)、新潮社・新潮日本古典集成(『集成』)、小学館・新編日本古典文学全集(『新編』)、朝日新聞社・日本古典全書(『全書』)、角川文庫(『角川』)。

4 『理尽鈔』の口伝聞書集である『陰符抄』を参照した。金沢大学附属図書館蔵の現存本は近世後期の写本であるが、引用資料等から推して、大橋全可の子貞真(正徳二年(一七一二)没)の編纂にかかる著作かと考えられる。ただし、明暦二年(一六五六)写の内閣文庫本『理尽鈔』の口伝傍書等と一致する部分も多く、近世前期の『理尽鈔』読解のあり方を探る上で貴重な資料である。『陰符抄』は初篇・再篇・再三篇からなるが、現存本は、初篇巻一から一〇、再三篇巻一から四〇に分かれ、この再三篇は再篇の内容をも含んでいる。引用に際しては、

『陰・初』、『陰・再三』と略記する。

また、『理尽極秘伝書』（尊経閣文庫蔵。四〇巻七冊）も、『陰符抄』とは別系統の口伝聞書集の抄出本である。

一 各章段名の後に、上下に界線を施して『太平記』の当該章段の梗概を示した。なお、『理尽鈔』が取り上げていない『太平記』の章段については、五字下げで表示した。

一 次のように各巻を担当し、三名の意見交換を経て定稿とした。

巻十四（長坂）、巻十五（加美）、巻十六（今井）。

目次

凡例

太平記評判秘伝理尽鈔卷第十四

目録

- 分国での新田・足利の抗争 33
足利・新田両陣の与党、主の挙兵を期待 34
節度使に当国の官領を給う例なし
新田領を關所にするは非仁政こそ人心掌握のもと 35
尊氏兄弟の新田排除は性急公家方に智将なく、主上は關主尊氏、朝廷を恐れて天下をとらざるは恥 36
- 小智ある義貞、世評を恐れ、朝敵にならず
義貞、朝敵として挙兵すれば優勢のはず
義貞に聖の器なし 37
先代に、新田は足利の家人のごとし
元弘の乱時、義貞、足利千寿王を敬せず 38
千寿王をめぐり、義貞と紀五郎左衛門、不和
- 新田・足利確執奏状の事 30
高師直、独断で新田領を關所とする 30
各庄郷で新旧領主が対立 31
師直、尊氏兄弟の制止を容れず各所で混乱、尊氏兄弟困惑 32
尊氏兄弟、朝廷への謀反を逡巡
新田義貞、分国内の足利領を横領

高時滅亡後、諸人、千寿王のものとに参集 39

憤激する義貞を、舟田入道諫める

新田・足利ともにおごりあり

義貞、若宮にて首実検の記事の

真相 40

足利の非を記す古『太平記』、

直義の命で改訂 41

義貞、神仏不信の由、朝廷内に

広まる

尊氏兄弟、讒口多し 42

尊氏兄弟、当初より天下掌握の

野望あり

足利、新田・楠との対戦を念頭

に軍勢催促 43

正成、尊氏御教書に応じた国人

伊丹を処分

正成、足利・新田が朝敵となる

を予測 44

足利方、展望なく、議論分かれる

師直、挙兵に積極的 45

直義、朝威を頼み、自らは上洛

せず

臆病ゆえに、足利朝敵となり天

下をとる 46

武家には勇が必要

足利に勝る新田も良将に非ず

47

朝政悪きゆえ、世人朝敵に与す

奏状に虚言多し

新田四郎、節度たる尊氏に無礼

の振舞い

足利に対する新田の対応は非

48

奏状の矛盾は智なきゆえ

新田挙兵の真実

奏状中に矛盾あり

義詮武功は虚偽

49

奏状の虚偽、尊氏兄弟の不義
准后、新田への警戒も帝に具申

50

新田、朝敵となるを覚悟 51

由良、正成殺害と持明院殿擁立

を提案

義貞、由良の提案に逡巡

舟田、謀反を勧め、正成殺害を

計画 52

義貞、正成を招待するも謝絶さ

れる

舟田、正成の許へ行き尊氏朝敵

問題を談ず

正成、義貞の招待をいぶかしむ

53

舟田、陰謀露見を察しながら平

静に应对 54

正成、恩地に新田陰謀のことを

伝える

正成、恩地に軍勢召集を下知

- 55 義貞、後日に正成暗殺の陰謀を告白
- 尊氏奏状の内容を探り、義貞自筆にて奏状執筆
- 朝敵になってこそ諸兵参集のはず 56
- 新田・足利ともに、ことの根本が見えず
- 57 新田の奏状に無礼の文言あり
- 尊氏上洛を不忠とするは非
- 新田奏状に謀言あるは、尊氏への返報か 58
- 洞院公賢、義貞からの事情聴取を提案 59
- 坊門宰相、足利への尋問を提唱
- 忠顯、新田・足利の確執を風聞のまま上申 60
- 正成の意見聴取に決定
- 正成、足利・新田の和睦を提案 61
- 坊門清忠の尊氏兄弟誅罰論に決定
- 正成、洞院公賢への述懐 62
- 一、朝敵蜂起を予測
- 二、公卿の合戦への介入を危惧
- 三、足利説得の勅使派遣を懇願 63
- 公賢、正成の落涙に感銘
- 公賢・清忠ともに良臣にあらず
- 正成、帝に存念すべて言上すべし
- 君の行跡悪き故、良臣なし 64
- 節度使下向事 64
- 新田東下、名和・楠は帝都守護の案 65
- 正成、足利方増大を予測、自らの東下を志願
- 義貞、正成の帝都守護を主張 66
- 新田軍の搦め手は弱兵
- 官軍東下の報に尊氏弱気 67
- 直義、張本人としての出頭を提唱
- 尊氏朝敵となるの報に、諸将尊氏に参集 68
- 新田四郎、義貞への合力を逡巡
- 足利方、開運を確信し、直義出陣 69
- 矢矧・鷲坂・手超河原闘事 69
- 義貞、東国勢の足利合力を知るも驚かず 70
- 舟田ら、朝敵たる尊氏への参軍をいぶかしむ
- 義貞、矢矧の敵軍の数を誇大に記す 71

矢作川での新田方の軍勢布陣

楠の陣図に習い上・中・下瀬へ

布陣 72

吉良・土岐の軍、挑発にのり渡

河し、敗走

義貞、自軍の渡河追撃を制す

73

中の瀬の師直軍、渡河して惨敗

74

下の瀬を渡河した細川・今川ら

も敗北

義貞、渡河した義助軍の撤退を

命ず 75

義貞、渡河作戦は敗北の因と説

く

正成、状況により渡河策が有利

もあり、と説く 76

直義の渡河は拙策

川岸での布陣の方法 77

渡河して攻め入る側に勢いあり

*陣の図 78

川岸での攻防、先陣・後陣の連

携必要 81

直義、合戦の要諦を知らず

義助に続き義貞も渡河すべき

82

正成、義貞の戦いぶりを擁護

長年、一族で前線を固める新田

の策を批判 83

正成、長年の発言に苦笑 84

義貞、宇都宮公綱の先陣志願を

許認 85

由良など、新田一門に奢りあり

86

義貞、宇都宮の提言に従いただ

ちに進軍

宇都宮軍、義貞に先行し未明に

足利軍を撃破 87

勝敗決着の頃、義貞参陣 88

義貞、『太平記』に公綱の働き

を記さず

直義、追撃軍に対し全く無策

足利方、手越川を前にあて布陣

90

新田方の宇都宮・千葉、手越川

を渡り進撃 91

義貞軍、別の瀬を探索し渡河、

夜襲 92

佐々木道誉降伏、土岐頼遠敗走

義貞、本陣を離れ出陣は不覚

93

義貞、伊豆の府にて軍勢増大を

期待

国府滞在の愚、三箇条 94

義貞、速攻せず評議するは拙劣

義貞、武威を示すべきこと 95

義貞の戦さだて、尊氏に十倍優

れる

鎌倉の諸卒、新田への与力なし

96

尊氏出家の体の真相

出家は軍勢に勇を進める良策

97

箱根・竹下合戦事……………97

赤松が語る元弘合戦の例に従い、

足利軍手分け 98

軍勢二分の敵に対し、要害を活

用 99

高経らの抜け駆け

正成、尊氏の命なき出陣を批判

新田方、竹下の足利軍を小勢と

誤認 100

武勇を頼む義貞、慢心のゆえ策

拙し

宇都宮公綱と菊池・松浦党、先

陣を競う 101

義貞、両者を宥め、九州勢に先

陣を任す

菊池・松浦の活躍、宇都宮これ

に助力 102

義貞、搦め手竹下へも派軍すべ

きこと 103

義貞、臆病な兵への対処法を問

う

武の道の理解が肝要

義貞の精鋭一六人、正成の精鋭

二八人 104

道普降参は非

公家の軍勢、義助の下知を聞か

ず敗走 105

中書王敗退を見ての義助出陣は

非

戦場へ幼子同伴すべからざるこ

と 106

義助、子への愛情ゆえ軍の備え

を乱す

大友・塩冶、二条為冬に先陣を

拒まれ、中書王を恨む

塩冶、大友に足利方への寝返り

を誘う 107

塩冶寝返りの理由 108

大友は世評芳しからず、足利に

親しむ

塩冶・大友、足利方に降伏、中

書王を攻める 109

塩冶の陰謀、三つの無道あり

大友の非道 110

義助、遠州まで敗走

義助、二度目の懸けは失策

官軍箱根引退事……………111

敗北した新田方の諸將の動静

111

勇謀なき直義、新田軍を追撃せ

ず 112

義貞、敗北時の十死一生の謀を

問う

正成、追撃軍への対処策を語る

113

散所寺法師、尊氏の動静を新田に注進 114

義貞、寡兵のゆえ尊氏を攻撃せず

正成、寡勢にて尊氏に勝つ法を語る 115

名和長年、千種忠顕を侮辱
足利方の一条次郎、義貞に組ま

んとして篠塚に討たる

竹下勝利後の足利方、作戦拙劣 116

新田、敗戦の事情を偽って記す

117

正成、足利陣への奇襲攻撃の謀を語る

新田軍、待ち受ける小山勢を南

北から討ち破る 118

足利方の下山・加々美、新田方

に志を寄せる 119

下山・加々美、義貞に会い参軍

下山・加々美、義貞に朝敵となることを勧む 120

加々美、新田の臣舟田・堀口を説き伏す

義貞挙兵に応じる二八人の誓状 121

義貞、朝敵となるを峻拒 122

義貞挙兵の意志なきを聞き、加々美ら、陣を去る

義貞の言、義にあたらず 123

武家の朝政批判、下心には欲心あり

義貞、自らの政治能力の限界を知るか 124

義貞、深き思慮なく、我が身大事のみ

事のみ

天竜川渡河の挿話、義貞の自讃 125

高師直、義貞軍追撃を提案する

も、直義に否定さる

敗走の新田を追撃せずは拙策

細川清氏・高師直、直ちに上洛を進言

直義、上洛は性急と慎重論 126

清氏、再度上洛を勧めるも、直義容れず

諸將の強い勧奨に、尊氏兄弟漸く上洛を決意 127

諸国朝敵蜂起事 …………… 128

正成に節度下さる 128

正成の情勢分析

一、足利尊氏の野心

二、赤松はじめ、各地で朝政に

不満 129

三、尊氏御教書発行は重大事 130

130

諸国の朝敵蜂起の報に、正成派遣は保留

遣は保留

正成、帝に准後の政治介入を強

く批判 131

正成の予言的中し、諸国に朝敵
蜂起 132

義貞、正成をねたむゆえに、連
携成立せずか 133

正成、再三尾張下向を提案する
も容れられず

正成、再度出陣を説くも出京許
されず

正成、軍勢配置を示しつつ出陣
を願うも却下 134

正成、一門の妻子を千劍破など
に預け在京 135

義貞、坊門清忠に政道の悪しき
を説く 136

正成、摂津の多田義玄を説得
137

正成、須磨に出陣、赤松らと対
決

楠軍、赤松勢を破る 138

正成、赤松を追い払い尼崎へ入
る

尊氏の使者、正成に足利との和
睦を説く 139

正成、尊氏の野心を指摘、合体
を峻拒

〈將軍御進発大渡・山崎等

合戦事〉……………140

京中の官軍少なし、長俊は部下
に酷薄 140

正成、参内の後、義貞に対面
141

正成、義貞の近江への出陣不可
を説く

正成、帝の山門行幸が良策と説
く 142

義貞、世論をはばかり京での合
戦に決定

正成、京中合戦の敗北を予測

官軍の勢多・宇治・大渡・山崎
への布陣 143

長年、勢多への出陣を主張
長年、義貞・正成の説得に応ぜ
ず、勢多防御を担当

楠、長年軍の寡兵を見て、矢

尾・志貴を派遣 144

正成、義貞に勢多が要所たるを

示唆

宇治での正成、在家を焼き払う
145

下民追捕は敵の兵糧をなくすた
め

尊氏、伊岐洲にて里村に食糧な
き理由を知る 146

尊氏、勢多に楠軍ありと恐れる
足利方、宇治の楠軍を恐れる
147

細川定禅、大蔵谷に着くも、赤

松軍おらず 148

久下時重、嶺の堂の官軍を追ひ
 払う

江田兵部、久下の油断をついて

これを撃破

大渡での足利方、作戦拙劣 149

橋を渡る野木与一の奮闘は文飾

150

籠城の兵、城外に出るべからず

城を出て戦う場合、三条 151

一、敵の先陣少なく、後陣も遠

い時

二、密集する敵には終日兵を疲

れさせてのち、出撃

三、陣を引く敵軍を追撃

官軍、城外へ出撃は失策 152

敗れて城へ逃げ帰る兵も締め出

すべきこと

山崎敗北は義助一代の不覚

大友・宇都宮の寝返りは言語道

断 153

勇の品々

公綱、勇足らず 154

大友は佞人

山崎敗北を聞き、官軍敗走 155

義頭、父義貞の参内のみを心が

け、作戦を誤る 156

主上都落事付 勅使河原自害

事…………… 156

山門行幸の際、一部の重宝を取

り忘れる 157

勅使川原の政道批判

准后・諸卿ら、正義漢たる勅使

川原を疎む 158

勅使川原の奮戦

戦場における力量と早業・勇

159

勅使川原は戦場で功なけれど義

あり

負傷のゆえの行幸供奉放棄は粗

忽

長年帰洛事付 内裏炎上事 …… 160

長年、内裏に赴くは邪義 160

勅使川原は粗忽、長年は邪義

161

正成、忍びの情報により作戦立

案、義貞に指示

義貞、これに対応 162

正成、山崎の劣勢を見抜く

山崎にて官軍敗北 163

正成、宇治にて軍勢配置

正成、木幡にて甲乙人を追ひ払

う 164

正成、醍醐・山科にて遭遇の桃

井・仁木を説得して、戦わず

165

正成、合戦以前に近江で米を徴

収

正成、収集した米・大豆を山門

に上す 166

將軍入洛事付親光討死事 … 167

結城の討死は忠あり 167

坂本御皇居并御願書事 … 168

米・大豆の分配、一部は残す 168

注 … 170

太平記評判秘伝理尽抄卷第十五

目録 … 205

園城寺戒壇事 … 206

尊氏、悪日による出撃遅延 206

勝ちを逸した尊氏、良将ならず 207

207

山門の戒壇独占は仏法に背く

戒壇建立にこだわる三井寺衆徒

も痴愚 208

反仏教的な両寺の争論

両寺対立を利用した尊氏の智謀

奥州勢坂本に着く事 … 208

顕家雪中の奥州出立 209

顕家軍に奥州の大軍参加

顕家軍、鎌倉・観音寺城を攻略 210

210

正成、顕家軍の食糧調達

顕家は勇ありて智謀足らず 211

顕家は東国経営に当たるべきこ

と

頼朝は東国を治めて成功

顕家も鎌倉にあらば人従うべし 212

〈三井寺合戦事〉 … 212

顕家と義貞の先陣争い 212

結城ら顕家先陣を推す 213

義貞、合戦の日延べを提案。正

成、争いを止め、明日出陣を

と説く

義貞、顕家に先陣を譲る 214

大館らと千葉、夜半に先陣争い 215

215

正成、大館らをなだめ、味方に

作戦指示

義貞・顕家の争論は不忠・不義